

プロローグ

わたしの人生で最高の瞬間が訪れたのは、取るに足りない、誰も覚えてはくれないバスケットボールの試合中のことだった。その日、わたしは何か不思議な力を感じた。その感覚は今も忘れられない。だが、それが何だったのか分かるまでには長い年月がかかった。実は、当時のわたしには理解できず、説明もできず、そして現実とは思えない、ある現象のおかげだったのだ。本書はそうした、人々を魅了し続ける現象にまつわる読み物だ。

わたしの通っていた小さな高校のバスケットボールチームは、二軍はおろか一チームを組むのもやっとの人数しかいなかったが、その中でもわたしは補欠だった。いつもと同様に、その試合もベンチスタートだった。代わり映えのない冬の日の午後、狭い体育館に入り、ゴールに入るよりはるかに多くのシュートを外すという、わたしにとつての試合前のルーティンをこなした。ところがどうだろう、説明できない出来事がこの後に起きたのだ。悲しいことに、この試合について他に覚えていることはほとんどない。例えば最終スコアだ。見当もつかない。どちらが勝ったのかも答えられない。唯一はっきりと記憶にあるのは、ウォーミングアップを途中で切り上げてコートに入ったに違いない、ということだ。

た。なぜなら、そうでもなければ、これから述べようとしている現象は起きなかったからだ。それ以前も、以降も、わたしの身に起きることはなかった。だからこそ、何年もたった今でも考え続けている。わたしは「ホットハンド」を経験したのだ。

一連の奇妙な出来事が始まったのは、ハーフタイム明けの第三クォーターから出場し、最初に打ったシュートが、ゴールリングに当たらずきれいに決まった時からだった。いい気分だった。次のシュートも完璧だった。ますますいい気分だった。さらに打ちたくなかった。そして実際にもう一本決めた時点で、「思い切って打てばどんなシュートも入るぞ」とわたしは感じ始めていた。

その結果、さえない選手だという証拠がたくさんあるにもかかわらず、相手チームも同じくおかしな結論に達したようだった。わたしがボールを持つと、ディフェンダーが二人つくダブルチームを仕掛けてきたのだ。彼らはだまされ、この選手には才能があると信じ込んでしまった。こうなると、テレビで試合を見てきた時間が役立つときがやって来た。わたしは、本当にシュートのうまい選手ならどう動くだろうと考えた。そしていざボールを手にする時、うまい選手のふりをした。そんな動きをする理由など今まで一度もあつたためしかなかった割に、驚異的な自信を持って、シュートフェイクを入れたのだ。なんと、これが成功した。二人のディフェンダーが、わたしのそばで思わずジャンプしてしまう様子がスローモーションのように見えた。気の毒にもフェイクに引っ掛かった彼らのおかげで、わたしはエスプレッソをすすする時間すらあるように感じながら、ゴールに向かってボールを放った。これが、完璧に決まった最後のシュートだった。まさに全てが驚きだった。一試合のクォーターだけで、自分の生涯通算得点より多くの得点を稼いでいた。

それから間もなく、わたしはバスケットボールをやめた。下手だったのが最大の理由だ。だがそれ以外にも、選手として既にピークを過ぎたと気付いたのも、理由の一つだった。この先、あのような経験つまりホットハンドが何度も押し寄せることはないだろうと思った。

ホットハンドとは何か。それは、普段の能力をはるかに上回り、いつとき超人になったと感じる状態のことだ。これほどの快感はない。バスケットボールを知らない人でも、そうした夢のような感覚には身に覚えがあるのでないか。ホットハンドはあらゆる分野に存在し、どんな人にも関係する現象だ。

バスケットボールにおけるホットハンドとは何か。それは、連続でシュートを二〜三本決め、ゴールリングがヘリポートのマーク並みに大きく見えて、「何本も連続で決めてきたのだから、次も入るはずだ」と確信している状態のことだ。ホットハンドを得た選手が経験しているのは、そういった輝かしい瞬間であり、それが訪れたときは忘れようがないものだ。しかし、ホットハンドの定義は一つに限らない。ただ、絶好調の選手の活躍を見ただけで、このことかとすぐに気付くはずだ。

ホットハンドがどんな気分か、わたしには分かる。バスケットボールの試合を見るのも好きだったが、プレーするのは、ニュージャージー・ターンパイク「有料高速道路」を運転するのと同じくらい、常に楽しかった。ところがホットハンドを経験した日は、いつも以上に気持ちが舞い上がっていた。チームメイトにパスするなどという愚かな考えは、一切浮かばなかった。また、「平均への回帰」と呼ばれる、夢心地に水を差すような現象が頭をよぎることもなかった。これは、最初に平均以上の結果を出した者は、二回目は平均に近づく、というものだ。わたしはボールに触れたらすぐにシュートを打とうとしたし、誰も止められなかった。まさしくわたしは絶好調^{ホット}だった。この最高の時間が続くうちは、確率を無

視している気分だった。もしコート上の全選手がホットハンドの存在を信じていなかったら、そんなのはばかげた思い込みだと一蹴いっしょくされたに違いない。だが、彼らは以前にもホットハンドを目の当たりにしたことがあり、わたしも見たことがあった。それまで、それがわたしの身に起きたことがなかった、というだけだ。

ホットハンドの一端に触れた体験は、バスケットボールをやめた後もずっと気になっていた。スポーツを続けられなくなった人の多くは、代わりにスポーツについて書くようになる。わたしもその一人であり、その時点でもホットハンドはまだ頭にあった。わたしは現在、『ウォール・ストリート・ジャーナル』紙のNB A（ナショナル・バスケットボール・アソシエーション。北米のプロバスケットボールリーグ）の記者であり、これまでにバスケットボールに関する記事を数多く書き、記者の肩書を利用して、NB Aの全三〇チームの奥深くまで入り込むこともできた。今では、ホットハンドをつかんだ選手を観察するのが仕事だ。そんなある日、業務を片付けながら、記事のアイデアを得るために最新の研究論文を読んでいたところ、わたしはあの日の自分を突然思い出した。ホットハンドという概念について、学術論文が何百と書かれていることをそのとき知った。

わたしは論文を読むのをやめられなかった。マンシヨンの賃貸借契約書よりも熟読した。ホットハンドが科学的なテーマとして扱われているので、どの論文にも大いに引き込まれた。内容を理解するための教科書が要らないほどだった。少なくともわたしはそう感じた。次から次へと読んでいった。絶好調に関する研究を読むわたし自身も、絶好調だった。経済学者や心理学者、そして統計学者たちが書いた数十年分の論文を読み漁り、ついに読み尽くした。

読破して初めて、なぜ多くの研究者が論文を執筆したのかが分かった。ホットハンドなどというものは、存在しないからだった。

* * *

米国ミネソタ州バインシテイは、地図で見ると同州のミネアポリスとダルースの真ん中に打たれた、ほとんど目に入らないような小さな点でしかない。それほど昔のことではない、ある冬の午後に、アメリカ人にも知られていないこの田舎町へとわたしは車を走らせた。目的は、その町の小さな高校がいかにして、全米における最も意外なスポーツの実験室として、スポーツ界に革新をもたらしたかを理解することだった。そのチーム、「バインシテイ・ドラゴンズ」がバスケットボールに取り組む様子を見に行った。

チームを率いるコーチは、歴史、公民、政治、地理、経済を教える教師だ。顔じゅうに黒々とひげを生やし、大きな目をしたその人物の名前をカイル・アレンという。アレンがこの町にやって来たとき、バインシテイ高校は芸術に秀でていることで有名で、それが唯一知られている特色だった。バスケットボールチームに所属する生徒の大半は、楽器も演奏した。また合唱団の一員として、試合前に国歌を斉唱する選手も多かった。冬に高校のミュージカルに出演するためチームを去った者もいた。図らずも彼はエース選手だった。表向きには、バインシテイ・ドラゴンズには大した印象がなかった。図らずも彼

ところがチームは勝った。勝ちまくった。彼らには分不相応なほどの、多くの勝ち星を挙げた。

わたしが興味を持ったのは、その勝ち方だった。飛行機でミネソタ州に入り、車でパインシティに向かい、高校を訪れると、教室でアレンの教える選手たちがクッキーとチーズカード「ラレッシュユーズの一種」をががつと平らげ、栄養補給しているところだった。ジャンクフードに夢中の彼らが、じきに屈強なバスケットボールマシンへと変貌を遂げる。

カイル・アレンが、初めてのコーチ業に就くためパインシティに来てまずやったのは、チームの予算を一気に使い果たすことだった。以前はNBAのチームしか入手できなかったようなたぐいの、有益な統計データを生み出すテクノロジーに大金をつぎ込むコーチは多かったが、アレンもその一人だった。パインシティの選手たちはすぐさま、個人別の指標やカスタマイズされた動画、くわえて、数学の授業で見るより多くの数字に触れる羽目になった。こうした大量のデータが、アレンのコーチ哲学を支える力になった。彼がここでコーチを始めたのは、スポーツの歴史において特殊な時期だった。マイケル・ルイスの画期的な著作『マネー・ボール』（中山宥訳、ハヤカワ・ノンフィクション文庫）が出版されたのは、アレンがまだ高校生の頃だった。この本の登場によって、スポーツ業界を揺るがすほどの、世間の隔たりが生まれた。アレンたちの年代は、その新旧どちらの世代にも影響を受けた。争点になったのは、スポーツで頂点を極めるには何から始めるか、という点だった。自分に関係するデータを手にする前から、アレンは、データに基づいて決定を下す重要性を理解していた。いざ現実が理想に近づくと、彼は蓄積したデータに飛び付いた。そしてさらに求めた。もっと大量のデータを、もっと良いデータを、と。

それまで、どのバスケットボールチームも、自分たちのことをまるで分かっていなかった。ミネソタ州の小さな高校に限った話ではない。一流チームですら、当てずっぽうでやっていたのだ。旧来の統計——試合ごとの得点といった、基本的な指標——の中にも、有用と思えるデータはあった。だがそれも、総得点数を試合数で割るといった程度の浅い使われ方しかしていなかった。

そんな時代も変わろうとしていた。アレンは、数字に何らかの価値を見いだすという自らの使命の一環として、チームの資金をほぼ使い果たした。選手たちには賢いプレーをしてもらいたかった。そして、バスケットボールに関して間もなく明らかになったのは、賢いプレーに必要なのは、より価値のある「いいシュート」と、価値のない「悪いシュート」を区別する、ということだった。このシンプルな洞察は、数十年に一度の革新的な発見だった。いいシュートは、レイアップとスリーポイントのみ。悪いシュートはこの二つ以外の全てだ。こうしてパインシティ・ドラゴンズは、悪いシュートをほとんど打たないチームになった。

彼らの戦略は全て、いいシュートの数をできる限り増やすことをベースにしている。カイル・アレン率いる、陽気なバスケットボールの反逆者たちが一試合で放つシュート数は、いいシュートが八五本ほど、悪いシュートは二〜三本というのが常だった。完璧な試合運びをしたときは、いいシュートのみになり、どんなチームよりも隙がなかった。悪いシュートの割合は、全シュート数の五パーセント未満だった——これは全てのNBAチームや大学のチーム、高校の強豪校より低い数字だ。「実は」とアレンは言った。「それでも、わたしたちの目標値より高いんです」¹

初めてデータの味を占めてからというもの、むさぼるようにデータを収集したアレンは、直ちにチームを数値化する作業を始めた。間もなくして、パインシティ・ドラゴンズはある項目で、州記録の一位

から三位までを独占することになった。それは、一シーズン当たりのスリーポイント成功数だ。彼らは iPad や従来の紙のスコアブック、そして男子高校生のおいが染み付いたロッカールームのホワイ トボードに、成績を記録した。ある夏には、チームの一人一人が体育館で過ごした時間数も計測した。さらには、選手が練習中にどのくらいしゃべったか調べるために、マネージャーを数人雇ったことすらある。そこまでやることに何かしらの根拠があるかのように、アレンはこう述べた。「基本的に、わたしたちには何もかも数字にする必要があるんですよ」

わたしが訪れた平日の夜、パインシティ高校の体育館には見覚えのある光景が広がっていて、思わず昔を思い出した。ここに似た体育館に、かつてわたしもいた。ここに似た体育館でプレーもした。ホットハンドを経験したのも、このような体育館だった。そうであるなら、わたしはアレンの教え子たちに共感できたとしてもおかしくなかった。

ところがパインシティ・ドラゴンズが見せているのは、バスケットボールの未来だった。わたしの目の前で、彼らはこの競技を未知のものに作り変えている最中だった。まるで空は緑色で、草は青色だと言われているような気分だった。わたしはこの若者たちに共感できなかった。なぜなら、どのシュートに最も価値があるかなど、考えたこともなかったからだ。わたしが価値があると考えていたのは、プレー中に恥ずかしい思いをせずに、夕食に間に合うことだけだった。これはわたしが下手くそだったせいもある。だが実を言えば、当時は誰一人としてシュートの価値など考えていなかったのだ。それが今では、誰もが考慮するようになっていく。

パインシティ高校の選手はひたすら、他校や大学や NBA のチームを打ちのめしたアイデアをいくつも蓄積し、それを徹底的に実行しているだけだった。シュートしていいのは、ゴールの目の前か、かなり離れた場所からのみで、それ以外の場所からは打たない。直感で理解しにくいこの戦略を、彼らは体で覚えるまでたたき込まれた。いいシュートだけ打つようと、コーチに指示される必要はもはやなかった。選手がやるべきは、バスケットボールのコートに視線を落とすことだけだった。目標とするゴール下のペイントエリア（制限区域）と、スリーポイントラインの外側の床の色は、床材の堅木の色だ。そして、その二つの間のエリア——ピルニアと一緒に泳いでいるも同然の場所だ——は、エメラルド色だ。実際に、パインシティ高校のコートでは、この恐ろしいエリアはエメラルド色に塗られている。これもまた、理想のプレーを頭に入れるための注意喚起だ。

「なるほど、それは理想のプレーですね！」。わたしが少しばかり夢中になっているこの型破りなチームを紹介すると、ある NBA コーチの一人はそう言った。「それで、チームは目標を達成できているんですか」

もちろん。パインシティ・ドラゴンズは、ミネソタ州内で最も恐るべきチームの一つになった。彼らは新たなデータやテクノロジー、そして新鮮で刺激的な考え方を取り入れることで、昔の固定概念に縛られずに、注目すべき結論を導き出そうとしていた。かつてわたしが恥ずかしいプレーをしてばかりだった頃から、まだ一〇年しかたっていないなかった。一世代で、バスケットボールの試合は変わった。わたしが正しいと思っていたことは、何もかも間違っていた。

好きなバスケットボールで、ホットハンドに期せずに出合ったことを、わたしは思いもよらない発見だと思っていた。だが実際は違った。ホットハンドの歴史は、常にバスケットボールと深い関わりがあった。必然的に、本書にはバスケットボールがたびたび登場する。それ抜きでホットハンドの本を執筆するのでは、誠実に欠けるからだ。長年ホットハンドを研究している非常に優秀な人々は、偶然にもバスケットボールが、そこから得た知見をもってそれ以外の世界を探索できる、素晴らしい理由を与えてくれることを分かっていった。

だが、わたしの胸に響いてきた逸話は、常にスポーツのものだけとは限らなかった。バスケットボールのホットハンドに関心を寄せた者の中には、天才的な学者やノーベル賞受賞者が何人もいたが、彼らは決してバスケットボールだけを研究しているわけではなかった。わたしのようにホットハンドを追求し始めると、至る所にそれを発見せずにはいられなくなる。

これこそ、一九八五年に発表された、ホットハンドを初めて研究した学術論文を読んだとき、わたしが我を忘れないように努めなければならなかった理由だ。この論文が心理学の古典にまでなったのは、「ホットハンドは存在しない」という結論が衝撃的だったからだ。にわかには信じられなかった。そしてすぐに気が付いたのは、ショックを受けたのはわたしだけではなかったということだ。誰もその主張を信じなかったことも要因となり、論文はあちこちで論争を巻き起こした。

わたしたちは皆、一度はホットハンドを見た経験があり、それを感じた経験もある。脳裏に焼き付いているとっていい。読者の気を引くこの論文の魅力は、皆が正しいと思っている現象に挑んだ点に

あった。明確な結論を提示したこの論文は、人間に関する永遠の疑問を、わたしたちに投げかけていた。すなわち、「見たり感じたりするものを、我々はどれだけ信じていいのか」という問いだ。

世界中のとびきり優秀な学者たちが、ホットハンドは存在するという確たる証拠をつかもうと、研究を続けてきた。見つけられない現象を証明しようと躍起になった結果、彼らは期せずして、ホットハンドをバスケットボール界のビッグフット「北米にいと信じられてる未確認生物」にしてしまった。だが、ここ数十年分の、くしゃくしゃに丸めたメモ用紙や折れた鉛筆、削除した集計表の数々は、あの論文の主張を裏付けただけだった。時がたつにつれて、ホットハンドの存在を信じるのは愚かだというのが、明白になっていた。

だが、本当にそうだろうか。

これが本書の核心となる謎だ。

わたしたちはこの「プロローグ」の時点では、ホットハンドは間違っているかもしれないという、科学の権威の意見に耳を傾け、受け入れ始めたばかりだ。しかし、やがて信じられない出来事が起きる。最近になって、やはりホットハンドの存在を信じてもいいかもしれない、と判明したのだ。

「ホットハンドは実在するのか？」と、あなたはそろそろ疑問に思っているだろう。答えは「イエス」でもあり、「ノー」でもある。ようするに複雑なのだ（これからホットハンドに関する本をまるまる一冊読もうと思っっているあなたは、それを既に察しているかもしれない）。ホットハンドをうまく利用できる機会が確実にある一方で、ホットハンドに従うと悲惨な結果を招く場合もある。ホットハンドに身を任せるのも、無視するのも、全く同じくらい高くつくのだ。

本書を通じて、そう感じてもらえると思う。これからあなたは、ホットハンド探求の軌跡を最初から終わりまでたどることになる。本書はバスケットボールに関する本ではないが、NBAのスーパースター、ステフィン・カリーのキャリア史上、最も重要な試合の最前列の席にご招待しよう。金融本でもないが、投資の常識に逆らって一財産を築いた投資家の、数々の秘密を垣間見ることになるだろう。美術や戦争も本書のテーマではないが、長期間行方不明だったゴッホの絵を発見した人々や、ホロコーストからユダヤ人を救った後に消息不明になった英雄を見つけ出そうと奮闘した人々と出会うはずだ。同じく音楽本でもないが、歴史から消えた天才作曲家を紹介しよう。文学や医学を扱った本でもないが、シェイクスピアや感染症について、予想以上の知識を得られるはずだ。テクノロジーを学ぶための本でもないが、音楽配信サービスのスポティファイのユーザーは、プレイリスト内の曲を再生する前に、ふと手を止めて考えを巡らせるようになるかもしれない。旅行記でもないが、アマゾンのジャングルや、わたしのお気に入りのテンサイ（砂糖大根）農場がある、北米のノースダコタ州とミネソタ州の州境を旅していただく。

本書は、このようなトピックが中心の本ではないが、これら全てに関わる本である。ホットハンドの驚くべき力をご紹介したい。まずは、ある男と火の話から始めよう。